

柔らかな未来

南 條 史 生

世界は急速な変化の中にある。一度は最も普遍的と思われた価値観が消滅し、新たな考え方、新たな状況が生まれつつある。消滅したのは世界の中心としての役割を演じてきた国、都市、思想、人々の近代主義にもとづいた一元的な世界観であり、新たに重要になったのは辺境の文化を含むより多様な思想、価値観、ヴィジョンである。

テクノロジーが情報と移動の技術を洗練させ、我々が安全に旅をしたり、確実に大量の情報を得ることを可能にした。芸術はその状況を反映して、世界の様々な国の文化や過去の遺産を引用したり、また新しいテクノロジーがもたらすヴァーチャルな現実、あるいは新しい感覚やヴィジョンを次々に表現の中に取り込んでいった。

しかしその狂乱のさなかに、内藤礼はひとり何者にも影響されずに自らの内にある独自のヴィジョンを掘り下げた。彼女は自らの小さな身体の中に、広大な内なる世界が広がっていることを見いだした。そして美術界と美術市場が、器用に流行を追う美術作品の登場に一喜一憂しているとき、内藤は何者にも似ない豊かなヴィジョンを開花させたのである。

内藤礼が最初に柔らかなフランネルの布の上に繊細で壊れやすい、見るからにはかない小さな彫刻を展開し、あたかもまだ見たことのない未来都市のようなインスタレーション「遠さの下、光の根はたいら」を発表したのは1989年の佐賀町ビスにおいてであった。

そのときそこには都市の模型にも似たミニアチュールの不思議な光景が広がっていた。それは小さく、同時に巨

大に見えた。それはディテールに対する配慮とともに、巨視的な視野から作られているようにも見えた。

ミニアチュールの繊細さは日本古来の美的伝統である。日本人は昔から巨大なものよりも小さなものにしばしば美を見だし、また感情を移入してきた。また小さなものは「かわいい」と同時に「弱く」、「はかない」。そして「か弱く」、「はかない」ものは容易に失われて消え去るがために、今そこに存在しているときだけそれを最大限に味わい尽くすべきだという「はかなさ」の美学があったように思われる。

内藤礼の作品の中に一貫して在るこのような「もろさ」の気配がもたらす美は、この佐賀町の最初のインスタレーション作品の時からすでに見ることができた。

内藤礼が1991年に再び佐賀町エキジビットスペースで「地上にひとつの場所を」を発表した段階から彼女の作品は日常的、物質的、世俗的な社会や、商業化されてパリやニューヨークや東京で喧伝される美術の文脈からはるかに遠い、圧倒的な精神的集中と直感的ヴィジョンの作り出す輝くような崇高さの感覚に満たされるようになった。作品は巨大な白いテントの中に広がる空間そのものになり、内部は「光」と「豊饒」と「夢幻」の感覚に満たされた。

そこには我々の誰にでも共通するようなノスタルジックな過去があると同時に、未来都市のイメージがある。それは情緒的で繊細な彫刻から成ると同時に、巨視的で明快な幾何学的構造を持つ。それは精神の優位を誇らしげに讃えていると同時に、触覚の、視覚の、

知覚の極めて身体的な感覚の詩をうたう。その作品は優しく観客を包み込むと同時に観客に厳しくその生き方を問いかけ、その美術に対する接し方を問い直し、また観客を選別し、ときには拒絶する。

テントの中の白い空間は巨大で、その中に展開された小さな彫刻群との間をつなぐ中間的な部分は存在しない。そのことによって観客は巨大さと小ささの大きなギャップに戸惑い、またそこに奇妙な浮遊の感覚を感じとる。もしこれが都市であるとするならそれは、異なった時代の街、あるいはどこか見知らぬ惑星の街を感じさせる。またもしこれがミニアチュールだとしたら、それは小さなものの集積こそが真実へ到るという祈りにも似た確信から来ている。

内部の印象は非常にミニマルである。それは日本の神社の建築を思い起こさせる。神道の建築は木材の地をそのまま見せた簡素なものであった。そして伊勢神宮において、それは1,000年以上にわたり、20年ごとに全く同じ様式で、全く同じ素材を使って、作り直されてきた。神社の宝物でさえもが、同じ形状、同じ素材で繰り返し作りなおされるのである。

そこには日本人が考えた、精神の形式としての美とそれを体現する物質というものに対する決定的な概念を見ることができる。日本では素材の古さには価値を見なかった。素材はいつも新しいほうがよいと考えられた。それが神に対する敬意につながった。価値は素材の中にあるのではない。形式の中に精神の美は宿っているのであり、それは確立された様式として、また技術として末代にまで継承されなければならない。伝統は維持されながら、更新されなければならない。それが日本の考え方だった。

内藤の「地上にひとつの場所を」は、佐賀町エキジビットスペースでの発表の後、1992年にニューヨークのニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アートで、1993年にパリのロン・ポアン・ギャラリーで、1993年に英国・ウェールズのオリエル・モスティンで、また1995年に日本の名古屋市美術館で発表された。そして今回ヴェニスでこの作品は再び蘇ることになった。この巨大なテント作品は展示のたびごとに再構築され、その中にある微細な宝物のインスタレーションは以前と同じように再制作された。それはまさに伊勢神宮の遷宮のように、一度出現した精神の美の形象をその形のままに保とうとする強い意思の表れである。

そして彼女はこの作品が展示されるときには、できる限り展示期間中同じ町に滞在し、1時間ごとに作品の状態をチェックすることを望んでいる。そのため彼女のこの作品を展示することは、招待する美術館にとっても相応の覚悟のいる展覧会となった。

内藤は、作品は自ずと現れた新たな生命であり、当初に構想された有様についてはもはや人の力を持って変えるべきではないと考えている。当初の作品のあり方は展示の期間中も妥協することなく守られなければならないとする彼女の信念は、作品に対する限りない畏敬の念の表れである。それは産み落とした子供を慈しみ、手をかけて育てるのにも似た、あまりにも愛情のこもった関わり合いの証であると言えるだろう。

作品の平面図を見ると、全体が女性器を象徴した形状をしていることからこのテントが女性の胎内のメタファーであることは明白である。しかし作品がたとえ女性の身体論を内に秘めているとしてもそれは結果であり、女性性は創作行為の中に意図せずして顕現す

る所与の条件の一つにすぎない。芸術の創作においては、それらの要件は常にアイデンティティー形成の避けがたい要素であると同時に、普遍へと至るために超克せざるを得ない条件でもある。

この作品は観客にとって創造と観念を飛翔させるための舞台であり、契機である。人はこの白い幕で囲われた空間の彼方に、無限を見る。その無限は、無限に連なる時間であり、無限に広がる宇宙であり、無限に広がる自分である。その空間の無限性は科学的・物質的に存在する宇宙ではない。人々の中に遥かな昔から宿り、また人々に永遠に夢見られるであろうところの内なる宇宙である。

観客は内藤礼の作品を見る前にじっと対面の時を待つ時間が与えられる。それは儀式の前の精神の統一にも似て、厳かに、静かに行われるだろう。そして観客は一人ずつ、テントの戸口まで巡礼の旅を歩む。それは短いと同時に長い旅である。そして作品と一对一で向かい合ったとき、人は美術が何であったのかをもう一度知ることになる。鑑賞者が一人で作品と向き合うことは、この作品においては鑑賞のための条件である。そして作品と静かに一对一で相対したとき、われわれがいつも美術を見ながら見ていなかったもの、美術でありながら美術以上であるところのものが静かに横たわっていることに気づくだろう。

彼女が設定したこうした鑑賞条件は作品を最善の状態で見せるだけでなく、またわずかの時間しか作品と向き合うことをせず、深く作品を見ようとしな

い専門家を含む美術の観客達に対するラディカルな批判ともなっている。彼女は言う。じっと待ち、そして一人で作品と対話しようとしな

い。そしてまた、彼女が常に作品とともにいなければいけないという条件を考えると、この作品は彼女と共に生きているのだということがわかる。この作品はインスタレーションであるが、実は生きる行為そのものでもある。それは美術でありながら、所有不可能な一時的な「現象」である。それゆえにこの作品を見ることのできる人は幸いである。しかしその人の数は少ないだろう。そして、それは人間の出会いと別離と同じように偶然的で、はかなく、ひとつの運命的なできごととして生起するだろう。

このような独特の性格を持った彼女の作品は、よりソフトでよりエフェメラルで、より感覚的な21世紀のヴィジョンを象徴している。それはまさに重厚長大の産業資本主義によって支えられた20世紀近代主義の終焉と、情報と文化と思考を核にした新たな文明の始まりを象徴している。

内藤の芸術は日本の伝統を引き継ぎ、それを止揚しつつ、われわれを普遍的精神の高みに導く。その高みにおいては全てが至福の感覚に満たされているだろう。そこでは我々の存在は肯定され、受け入れられ、許されている。それは未だに様々な不幸と憎しみに彩られている現代の世界において、はなはだ希な瞬間であるといえるだろう。「我我の存在は、様々な問題を引きずりながらも、それでも意味がある」と内藤の作品は言う。

それは未来を信じることへつながるだろう。それは国境を越え、時代を超えて人間の普遍的希望を信じることでもある。

そしてわれわれは理解するだろう。美術は今日でも厳然と意味を持って存在し、輝くことができるし、またその輝きは人の魂を慈悲を持って救うことができるのだということ。